

歯科口腔外科学

1 構 成 員

	平成23年3月31日現在
教授	0人
准教授	1人
講師(うち病院籍)	2人 (2人)
助教(うち病院籍)	1人 (0人)
医員	7人
研修医	5人
特別研究員	0人
大学院学生(うち他講座から)	3人 (0人)
研究生	0人
外国人客員研究員	0人
技術職員(教務職員を含む)	2人
その他(技術補佐員等)	1人
合計	22人

2 教員の異動状況

- 加藤 文度 (准教授) (H14.10.1～現職)
 長田 哲次 (講師) (H15.3.1～現職)
 増本 一真 (講師) (H22.8.1～現職)
 渡邊 賀子 (助教) (H22.8.1～現職)

3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成22年度
(1)原著論文数(うち邦文のもの)	2編 (0編)
そのインパクトファクターの合計	7.15
(2)論文形式のプロシーディングズ数	0編
(3)総説数(うち邦文のもの)	0編 (0編)
そのインパクトファクターの合計	0.00
(4)著書数(うち邦文のもの)	0編 (0編)
(5)症例報告数(うち邦文のもの)	0編 (0編)
そのインパクトファクターの合計	0.00

(1) 原著論文 (当該教室所属の者に下線)

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Watanabe Y, Katou F, Ohtani H, Nakayama T, Yoshie O, Hashimoto K: Tumor-infiltrating

lymphocytes, particularly the balance between CD8+ T cells and CCR4+ regulatory T cells, affect the survival of patients with oral squamous cell carcinoma. Oral Surg Oral Med Oral Pathol Oral Radiol Endod.109: 744-752, 2010.

インパクトファクターの小計 [1.50]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. Nakayama T, Watanabe Y, Oiso N, Higuchi T, Shigeta A, Mizuguchi N, Katou F, Hashimoto K, Kawada A, Yoshie O: Eotaxin-3/CCL26 is a novel functional ligand for CX3CR1. J Immunol. 185: 6472-6479, 2010

インパクトファクターの小計 [5.65]

4 特許等の出願状況

	平成22年度
特許取得数(出願中含む)	0件

5 医学研究費取得状況

	平成22年度
(1) 文部科学省科学研究費	4件 (689万円)
(2) 厚生科学研究費	0件 (0万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0件 (0万円)
(4) 財団助成金	0件 (0万円)
(5) 受託研究または共同研究	0件 (0万円)
(6) 奨学寄附金その他(民間より)	0件 (0万円)

(1) 文部科学省科学研究費

1. 鈴木浩之(代表者) → 長田哲次(代表者) 基盤研究(C) 顕微質量分析による口腔癌の予後および転移マーカーの研究・分子病理診断法の開発 221万円(新規)
2. 増本一真(代表者) 基盤研究(C) 高分子ナノミセル型インドシアニングリーンを用いたがん診断・治療技術の開発 286万円(新規)
3. 加藤文度(代表者) 基盤研究(C) 口腔癌胞巣内とその周囲間質へ浸潤するリンパ球の性質の相違とその機能的役割の解明 65万円(継続)
4. 渡邊賀子(代表者) 若手研究(B) 口腔癌でのCCL22+IDO+樹状細胞による制御性T細胞の誘導とその役割の解明 117万円(継続)

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0件	0件
(2) シンポジウム発表数	0件	0件

(3)学会座長回数	0件	2件
(4)学会開催回数	0件	0件
(5)学会役員等回数	0件	0件
(6)一般演題発表数	0件	

(2) 国内学会の開催・参加

4) 座長をした学会名

長田哲次 第35回日本口腔外科学会中部地方会

増本一真 第53回日本口腔科学会中部地方会

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数(レフリー数は除く)	0件	0件

9 共同研究の実施状況

	平成22年度
(1)国際共同研究	0件
(2)国内共同研究	0件
(3)学内共同研究	0件

10 産学共同研究

	平成22年度
産学共同研究	0件

11 受賞

(1) 国際的な賞等の授賞

Katou F, Watanabe Y : The Best Paper Award 2010 : Oral Surg Oral Med Oral Pathol Oral Radiol Endod.

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 下顎骨離断後の再建法による評価および遊離骨移植後のインプラントの応用

下顎悪性腫瘍等で、下顎骨離断が必要となった症例における再建方法について評価を行った。再建プレートによる再建と自家骨による再建の群において、術後の合併症は再建プレートによる再建を行った群の方が多かった。自家骨を用いた再建の群では、その後、義歯やインプラントを用いた補綴処置を行うことができた。今後、インプラント植立による補綴処置を行うことで、どの程度の機能回復が望めるかを検討していく予定である。

2. 口腔扁平上皮癌における免疫細胞の役割

口腔扁平上皮癌において、様々な種類の免疫細胞の浸潤が認められることを、これまでに明らかにしてきた。本期間において、浸潤細胞の中でも、抗腫瘍反応を妨げる因子のひ

とつである制御性 T 細胞に着目して研究をすすめた。その結果、制御性 T 細胞は口腔扁平上皮癌の癌間質に浸潤していること、癌間質に浸潤する Foxp3 陽性制御性 T 細胞全体の細胞密度は予後に影響しないこと、CCR4 陽性 Foxp3 陽性制御性 T 細胞の細胞密度が高くなると予後が不良になることが分かった。